

西安外大の図書館について

西安外国語大学日本語学部教員 梁 濟邦 (りょう さいほう)

西安外国語大学は1952年に創立され、中国西北地区で唯一の外大である。西安外大の図書館は2002年の50周年記念をきっかけに一新され、8階建てに変身した。総面積は8,400平方メートル、4つの閲覧室、自習室、コンピュータ自習室などある。一度に2千人ほど受け入れることができる。館内蔵書は50万冊余り、外国語、文学を中心として観光、貿易、歴史などいろんな分野の関係書籍がある。貸出は教職員、13,000人余りの正式学生を主に対象としている。



以前よりだいぶ広くなったとはいえ、年々学生募集の定員増加によって、専用教室が殆どなくなり、図書館は特に学生全員にとって落ち着いて勉強できる少ない場所になっている。その中で新しくできたコンピュータ自習室は一番人気があって、いつも満員状態である。

今実力重視の中国社会では、授業を受けるのはもちろんのこと、より多くの知識を身につける必要がある。それで、大学生にとって、図書館は毎日欠かせない存在である。

改革開放やグローバル化に応じることができる人材養成に大きく期待されている西安外大の図書館は新しいスタートをきっていて、重要な役割を果たしている。

ドイツ文学わき道散歩(8)

誰からも愛され、許される人生は果たして幸福か。ヘルマン・ヘッセの小説集『メルヒェン』収録『アウグストス』では、そんなテーマがキリスト教のみならず儒教の教えをも思わせ、東西の思想に通じたヘッセらしさが窺われる。心の清涼剤として大人に人気があるのも頷ける作品である。

ヘッセはわが国で最も読まれているドイツ文学と言っても過言ではない。厳しい受験勉強の先に待ち受けた生活の中で、「車輪の下に押し潰される」思いをする少年ハンスを描いた『車輪の下』は、中学・高校の図書室で必ず見かける作品ではなかろうか。ハンスの苦しみは、いわば青春の苦さである。同作は重苦しい雰囲気独特の作品だが、ヘッセが世に出した多くの傑作の中には、『ゲルトルート(春の嵐)』や『郷愁』『デミアン』のように青春の美しさ、貴さを謳ったものもある。読み手が青春時代と呼ばれる時に身を置いては共感し、過ぎては懐かしさに胸を熱くする。その魔力こそが、発表当時から百年近く経た現在でも色褪せない輝きで読者を魅了し続けているヘッセの秘密なのだ。

ところで、ヘッセと言えばナチスに弾圧された作家としても有名である。1914年、新聞に「おお友よ、そんな調子はどうぞ!」という一文を掲載した彼の祈りは、空しく時代の波に呑まれた。思想統制、反ユダヤ主義、文化人の追放、焚書、敵国のものは文化に至るまで悉く否定する風潮。戦後のノーベル文学賞受賞は、全ヨーロッパを覆った悲しい暗雲に心を痛め警鐘を鳴らしたヘッセが、その時代と自らの精神障害を克服してこそ受けた栄光と言えよう。この時期、ヘッセのようにナチスに抵抗した作家だけでなく、利用された作家の存在も忘れてはならないのだが、それはまた別のお話。

1999年度ドイツ語学科卒業生 小林 ゆかり